

巻頭によせて

院長 鈴木彦之

市立病院医学雑誌第13巻の発刊を迎え、年々の論文数の増加もさることながら、多くの研修医の名がオーサー-或いは共同研究者として記載されているのをみて、研修教育に関わってきた者の一人として大変喜びに絶えないものがあります。

懐えば当院の研修教育は当時の丹野院長の「医療レベルの向上は病院に教育を取り込まなければありえない」との決意を受けて、教育病院の指定のためのもっとも厳しいハードルであった、20体以上・50%を越える剖検率をクリアすることが先決と、常勤病理医の不在の中で、大学病院に遺体を日夜を分けず運び、昭和44年に念願の日本内科学専門医指定教育病院となり、杉山(現当院内科)、布川(現労災病院循環器科)の両先生を迎えたことに始まります。その後各科が専門医、認定医の修練施設の指定を順次受け、さらに病院が現在地に新築移転し、施設及び診療科の整備されたことから、翌昭和56年厚生省の研修教育病院と認定され、外科、小児科が加わり、また平成2年より後期研修2年のレジデント制を導入し現在に至っております。発足当初は研修の目標を医師としての基本的知識と技術を身につけて、患者の信頼と協力が得られるような臨床医となることを専一に教育をすすめてきましたが、その後の著しい医療技術の進歩、高度医療機器の導入、さらに診療各科の専門化、それに伴う指導医の増員強化もあり、研修内容は格段とレベルの高い知識・技術習得がカリキュラムに盛り込まれるに至っております。また平成3年度よりの救命救急センターの併設により、救急センターのローテイト・当直がデューティとされたことから、プライマリーケアの研修が一層充実しましたが、研修医にとってはその繁忙が益々厳しくなっているのが現状でしょう。

然しこの中で、その繁忙に流される事無く、研修の期間中に学会の発表2題と症例・臨床研究についての論文1題を残すことを要望してきたところですが、漸くその実があがって来たことが本誌より窺えます。

自分の症例について、論文に纏め或いは学会に発表することは、現在の勤務の中で可成の努力を要する事ですが、これは単に医学論文の書き方を習得するに止まらず、その症例について先人の業績を検索し、それに考察を加える事から、その一例は数十例の経験に匹敵することとなり、向後の診療の精度を高める事となりましょうし、その姿勢は医師としての一生を通じて求められるものと考えます。「教育のない病院は一流といえない、また発展もない」というウイリアムオスラーの言葉を結びとして添え、今後とも本誌が研修の成果の論文で飾られるような、充実した研修教育でありますよう、各科常勤医の先生方よりよい研修に向けての、暖かく厳しい指導と一層のご協力を願って巻頭言に代えます。

(付記) 菊池 章先生のご退官にあたり、昭和59年より本誌の編集に携わったご苦勞に対し、紙上を借りて病院職員を代表して深甚な謝意を表する次第です。